

従業員向け

管理者向け

大規模イベント向け 食品防衛対策 学習資料

[運搬・保管編]

改訂版



日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

はじめに ～「食品への意図的な毒物等の混入」とは？～

内容

- (0-1) 定義
- (0-2) 食品衛生対策と食品防御の違い
- (0-3) 大規模イベントで食品防御に取り組む必要性
- (0-4) 意図的な混入が及ぼす影響
- (0-5) 食品防御の実施範囲

ポイント

- 「食品への意図的な毒物等の混入」とは、どのような事案を指すのでしょうか？
- 食品衛生対策と食品防御の違いは何でしょうか？
- 会社やお客様に及ぶ影響とは？

はじめに ～「食品への意図的な毒物等の混入」とは？～

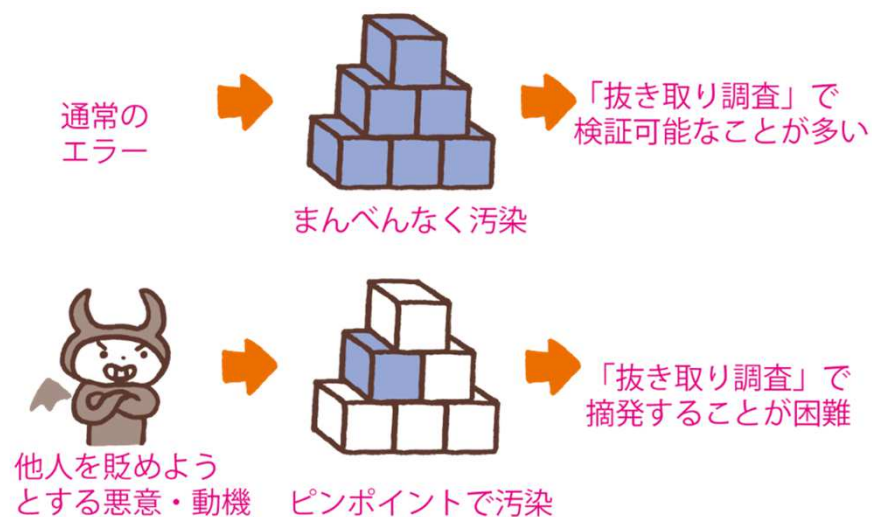
(0-1) 定義

- 「食品への意図的な毒物等の混入」とは、「食品の製造、運搬・保管、レストランなどでの調理・提供の過程において、食品に毒物などを意図的に混入し、喫食者に健康被害を及ぼす、または及ぼそうとする行為 (※) 」のことをいいます。そして、その「意図的混入」を防止する対策のことを、「食品防御」といいます。

(※) 以降、表記の短縮のため、これを「意図的混入」ということにします。

(0-2) 食品衛生対策と食品防御の違い

- 食品衛生対策は、従業員や生産システムの、「悪意のない間違い（エラー）」を防止しようとするものです。それに対して食品防御は、他人をおとしめようとする実行犯が、「悪意をもって意図的に毒物などを食品に混入する」ことを防ぐものです。
- 実行犯は、通常の食品衛生対策では防ぐことができない手口で毒物を混入しようと考えられます。そのため、それを防止する対策、すなわち「食品防御」を実施しなければ、防ぐことが難しいのです。



はじめに ～「食品への意図的な毒物等の混入」とは？～



(0-3) 大規模イベントで食品防御に取り組む必要性

- 大規模イベントは、世界的に注目度が高く、テロリスト等の標的となりやすいイベントです。加えて、労働力需要の一時的な増加により、必要な労働力の確保が難しくなることが想定されており、従業員に不満が蓄積しやすい状況が生じる可能性があります。
- 健康被害を及ぼす可能性のある毒物・劇物等は、農薬や洗剤・消毒薬として販売されているものもあることから、意図的混入は他の犯罪・テロと比較して、容易に実行可能です。また、意図的混入は、食品衛生上の問題で発生した食中毒と異なり、なに（毒物）を、どれだけ、どこに混入されたかを速やかに特定することが困難であるため、被害の拡大防止が難しいことが特徴です。

➤ 毒物等の混入行為の防止の困難さ

意図的混入に対する安全性を確認するための公的な権限は、現状ではどこにもありません。したがって現状では、飲食提供事業者の食品防御に対する自助努力、および現場の従業員の意識が、食品防御の最後の砦（とりで）となっています。

- 大規模イベントにおいて、万が一意図的混入が発生した場合、我が国の国際的な評価のみならず、食品を運搬・保管した事業者の評価も低下する可能性があります。そのため、十分な未然防止対策と、被害を最小限にするための対策が必要です。観客等と間接的に接する食品関係の運搬・保管事業者も食品防御を実施する必要があります。

はじめに ～「食品への意図的な毒物等の混入」とは？～

(0-4) 意図的混入が及ぼす影響

- 意図的混入は、喫食者には健康被害（直接被害）を、事業者には事態収拾コスト（間接被害；製品回収コスト、苦情対応コスト、信頼失墜による減益など）をもたらします。

表：過去における事例

発生年(場所)	実行犯	使用毒物等	汚染対象	被害
1984年(米国)	カルト集団	サルモネラ菌	レストラン10か所、水道タンク	健康被害751名
1985年(日本)	不明	除草剤	自動販売機(清涼飲料)	死者12名
2003年	テロ組織	リシン	軍の食品	未遂
2003年(米国)	従業員	ニコチン	肉塊	健康被害92名
2007～8年(中国)	従業員	農薬	製造過程	健康被害10名、回収612トン、当事者企業倒産
2009年(米国)	従業員	農薬	レストラン	健康被害48名、25万ドルの損失
2013年(日本)	従業員	殺虫剤	製造過程	問合せ1日最大12万件、回収600万パック超、営業利益20億円減益

(0-5) 食品防御の実施範囲

- この学習資料〔運搬・保管編〕では、イベント会場（※）の飲食提供施設向けの物流施設（物流倉庫等）および運搬工程（輸送車輛）を対象とします。

（※）例えば選手村／競技場、プレスセンターなど。

ここからは、食品防御の5つの手順にしたがって、話を進めていきます。

【手順1】 準備

【手順2】 一般的な防犯対策の徹底

【手順3】 組織マネジメント

【手順4】 毒物等の混入予防

【手順5】 モニタリングと対策の改善

【手順1】 準備

内 容

(1-1) 食品防御の取組の宣言

(1-2) 食品防御を行う担当者の決定

ポイント

- 食品防御を確実にを行うためには、各飲食施設等の責任者の決意だけではなく、従業員一人ひとりの意識改革も必要です。
- そのうえで、食品防御担当チームを結成し、食品防御の実施・改善についての責任の所在を明らかにします。

【手順1】 準備

(1-1) 食品防御の取組の宣言

- 経営者や物流施設および運搬工程の責任者は、食品防御に取り組む必要性を認識し、トップダウンで取組を進めましょう。経営者や責任者自らの言葉で従業員に取組の必要性を語りかけ、現場の従業員の協力を引き出しましょう。

(1-2) 食品防御を行う担当者の決定

- 経営者や物流施設および運搬工程の責任者は、食品防御に取り組む体制と、物流施設および運搬工程における食品防御の実務担当者を決めましょう。専任の担当者を確認できない場合は、品質管理の担当者を充てることも、物流・運搬工程の把握に係る観点から有効です。
- 食品防御に取り組む体制のもと、実務担当者は、以下を参考に定期的な打ち合わせを行いましょう。

➤ 食品防御の実務担当者が責任をもって実行すべきこと（例）

- 関係者（食品防御の実務担当者、施設責任者、食品衛生責任者、人事や総務の責任者など）を集め、毒物を混入されやすい場所・工程を共有する。（【手順4】参照）
- 優先すべき対策を検討し、実施と検証、改善点の検討を行う。

【手順1】 準備

【手順2】 一般的な防犯対策の徹底

【手順3】 組織マネジメント

【手順4】 毒物等の混入予防

【手順5】 モニタリングと対策の改善

【手順2】 一般的な防犯対策の徹底

内 容

(2-1) 敷地外から敷地内への無断侵入の防止

(2-2) 倉庫内への無断侵入の防止

ポイント

- 食品防御の第一歩は、一般的な「防犯対策」の徹底から始まります。
- 全体を、“敷地” “倉庫” “食品の保管スペース”の3層構造で捉えると、防犯対策の検討がしやすくなります。

【手順2】 一般的な防犯対策の徹底

(2-1) 敷地外から敷地内への無断侵入の防止

- 敷地外から敷地内への、無断侵入の防止対策を行きましょう。

➤ 外周のセキュリティ管理

- 敷地内に、関係者以外の人が入り込むことを防ぐため、フェンスや、「進入禁止」「関係者以外立ち入り禁止」などの掲示物を設置する。
- 頑丈なフェンスを設置しても、出入り口がたくさんあったり、出入り口の管理ができていなければ意味がないため、出入り口の数が必要最小限とし、守衛所の設置、セキュリティゲートの設置など、関係者だけが出入りできるような管理を行う。

敷地

倉庫

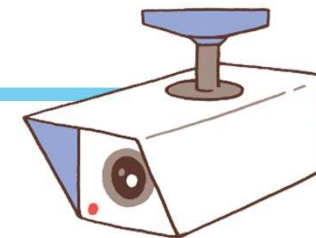
食品の
保管
スペース



➤ 物流施設への訪問者の把握

- 食品の搬入等を目的とする訪問者に対して、氏名、所属、訪問理由、日時、訪問先（部署・担当者等）、持込み品等の必要事項を定め、事前登録を必須とする。
- 受け入れ窓口は、訪問者が来訪した際、氏名、所属、訪問理由、訪問先（部署・担当者等）、持込み品等を申告させる。受け入れ窓口は、事前登録と照合・確認を行ったうえで、訪問先まで同行するなど、訪問者が敷地や建物内を単独で行動しないように対応する。
- 事前登録のない訪問者および事前登録と申告の内容に相違がある訪問者には、敷地内への立ち入りを認めないようにする。また、必要なもの以外の敷地内への持込みも認めないようにする。特に、飲食物・ペットボトル・携帯消毒液等については、その内容を確認することが望ましい。

【手順2】 一般的な防犯対策の徹底



(2-2) 倉庫内への無断侵入の防止

- 食品の保管スペースを含む倉庫内への無断侵入を防ぐため、従業員の目視、防犯カメラ等による監視を行いましょう。 防犯カメラは、犯罪やテロ行為の抑止効果が期待できるとともに、有事の際の事後確認にも有用です。

➤ 監視

- 従業員には、器物の破損、不用物の放置、異臭、見慣れない人がうろついているなどの不審な事態に気が付いた時には、すぐに関係者（食品防御の実務担当者、施設責任者、食品衛生責任者、人事や総務の責任者など）に報告させるよう徹底する。（「おかしいな」という思いを、自分の中だけにとどめさせない。）
 - ノーチェックで往来が可能な出入り口（例：人目につかない従業員専用出入り口など）、外部からの人の立ち寄りがある駐車スペースから建物への動線などについて、カメラによる監視を検討する
- 人気のない出入り口、窓など、簡単に外部から侵入できる場所は、鍵を取り付け、施錠を行いましょう。
 - 出入り口や窓の数を減らすことは、人の出入りの管理を容易にするとともに、カメラや鍵の設置数を減らすことにも役立ちます。ただし、防災上の観点も忘れず、必要以上に減らしすぎないように注意してください。



➤ 施錠等

- 外部から侵入可能な場所を特定し、センサーなどの機械警備、封印、頑強な鍵の取り付け、施錠ルール（施錠確認の頻度やタイミング、開錠・施錠の担当者、鍵の保管者・保管方法、暗証番号を知る従業員の限定）の徹底、格子窓の設置等の対策を行う。
- 後述する（4-1）において「脆弱性」が高いと判断される場所の付近については、特にこれを徹底する。

【手順1】 準備

【手順2】 一般的な防犯対策の徹底

【手順3】 組織マネジメント

【手順4】 毒物等の混入予防

【手順5】 モニタリングと対策の改善

【手順3】 組織マネジメント

内 容

(3-1) 従業員の採用

(3-2) 従業員の教育

(3-3) 従業員の配置

(3-4) 制服・IDカード等の管理

(3-5) モニタリング

ポイント

- 従業員、会社を“あらぬ疑惑”から守るためにも、しっかりとした組織マネジメントが必要です。

【手順3】 組織マネジメント

(3-1) 従業員の採用

- 従業員等の採用面接時には、申告内容に虚偽がないかを確認するため、各種証明書等の原本を確認するとともに、応募の動機や自社に対するイメージ等について、可能な範囲で確認しましょう。
- 派遣社員等についても、派遣元等に依頼して同様の対応を行いましょう。

(3-2) 従業員の教育

- 従業員に、意図的混入が発生した場合は、従業員自身が疑われる可能性があることを認識してもらい、食品防御の重要性を理解してもらいましょう。
- 5S（整理、整頓、清掃、清潔、習慣づけ）に努め、不審物等の有無を定期的にチェックすることで、「普段と違う」ことに気づきやすい環境を整えましょう。
- 従業員教育の際には、従業員による犯行を誘発させないよう、部署や役職に応じた内容に限定する等の工夫を行ってください。



➤ 5Sの徹底

- 使用する道具、器具等について、定位置・定数管理を行う。
- 不要な物、利用者・所有者が不明な物が放置されていないか、常に確認する。
- 配電盤など、不要な物を隠すことができる場所は、施錠・封印する。

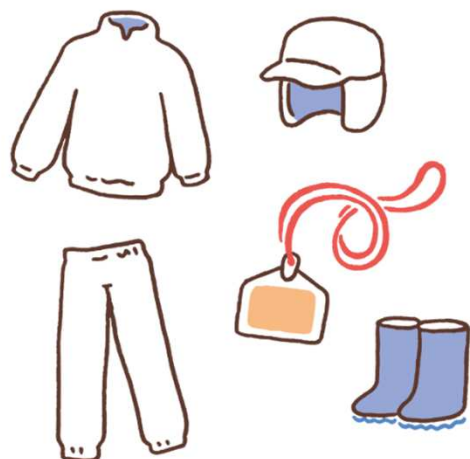
【手順3】 組織マネジメント

(3-3) 従業員の配置

- 後述する(4-1)において「脆弱性」が高いと判断された工程や場所への従業員の配置については、事前に面談を行い、十分信頼に足る従業員を配置するようにしましょう。
- 従業員どうしで一声かけ合うことを習慣づけし、持ち場に、その担当ではない従業員がいたら、他の従業員がすぐに気づくことができるようにしましょう。

(3-4) 制服・IDカード等の管理

- 従業員になりすまして飲食提供施設等内に潜入されることを防ぐため、従業員に貸与する制服や名札（顔写真付きが望ましい）、IDカード、鍵などの盗難・紛失に注意しましょう。
- 偽造防止のため、IDカードの画像・デザインが漏洩していないか、SNSなどインターネットのモニタリングを可能な範囲で行いましょう。
- 貸与品は番号管理を行うなどして、貸与品の所在と数を常に把握しましょう。



【手順3】 組織マネジメント

(3-5) モニタリング

- 従業員が意図的混入を行う動機の1つとして、職場への不平・不満が考えられます。そのため、各責任者は、従業員について、従来とは異なる言動の変化などに注意し、不満の有無を継続的に確認しましょう。
- 特に、後述する(4-1)において「脆弱性」が高いと判断された工程や場所へ配置する者や、新規採用者については、随時面談を行うなど、丁寧にコミュニケーションを取るようにしてください。
- 取り扱った食品への意図的混入が疑われた場合に備え、従業員の勤務状況、業務内容、勤務位置、役割分担等を正確に把握しておきましょう。

➤ 朝礼や定期的なミーティングの実施

- 食品防御の実務担当者は、朝礼や定期的なミーティング等を通じて、従業員のいつもと違う言動に注意し、従業員の様子を常に気にかけるようにする。

➤ インターネット・SNSモニタリングの実施

- 職場への不平・不満の捌け口として、SNSなどインターネット空間が選ばれることもある。そのため、イベントに関する内部情報や雑言がアップされていないか、インターネット上のモニタリングを可能な範囲で行う。

➤ 記録の保存

- 従業員の勤務状況、業務内容、勤務位置、役割分担を正確に記録・保存する。この際には、非接触ICカード等に対応した電子的な入退出システム等を利用すると便利である。

【手順1】 準備

【手順2】 一般的な防犯対策の徹底

【手順3】 組織マネジメント

【手順4】 **毒物等の混入予防**

【手順5】 モニタリングと対策の改善

【手順4】 毒物等の混入予防

内 容

(4-1) 倉庫内における脆弱性の把握

(4-2) 毒物等を食品に近づかせないための対策

(4-3) 悪意を持つ者を食品に近づかせないための対策

(4-4) 混入行為の防止

(4-5) 食品や包材等の納入・保管に関する対策

(4-6) 運送車輛の対策

ポイント

- 毒物等の混入防止のためには、まず施設内の脆弱性を知ることが重要です。
- 脆弱な場所の近くに「危険な物を置かない」、「むやみに人を近づけない」、「監視等による水際対策」が効果的です。

【手順4】 毒物等混入の予防

(4-1) 倉庫内における脆弱性の把握

- 食品防御を検討するにあたっては、食材の納入に始まり、料理の提供に至るまでの全ての工程・場所において、どこに毒物等が混入されると危害が大きくなるか、どこなら混入されやすいかを想定し、どこに、どのような対策を優先して行うのか決めることが重要です。
- 「そこに毒物等を混入すれば、高い確率で多くの被害を起こすことができる工程・場所」であるにも関わらず、「十分に監視の目が届いていない工程・場所」を、「脆弱性が高い工程・場所」と言います。具体的には、以下の工程・場所が考えられます。



表：脆弱性が高い工程・場所の例

脆弱な工程や場所の特徴	脆弱な工程や場所の例
直接食材に手を触れることが可能	原材料の下ごしらえ、素手でこねる、トッピングなど
無人、または一人での作業	原材料や提供前食品の保管庫、冷蔵庫など
色々な人の立ち寄りがある	原材料の受け入れ、製品の出荷、清掃場所に近い工程など、メンテナンスが必要な機材に近い工程
その後の工程に洗浄や加熱がなく、直接人の口に入ってしまう	ポット・ピッチャー・ボトル、調味料・ドレッシング、配膳、ビュッフェの大皿など
一度の攻撃で多くの被害を発生させることが可能	給水タンク、大鍋など

サラダバー、
ビュッフェ、ド
リンクバー、
モバイルベン
ダー

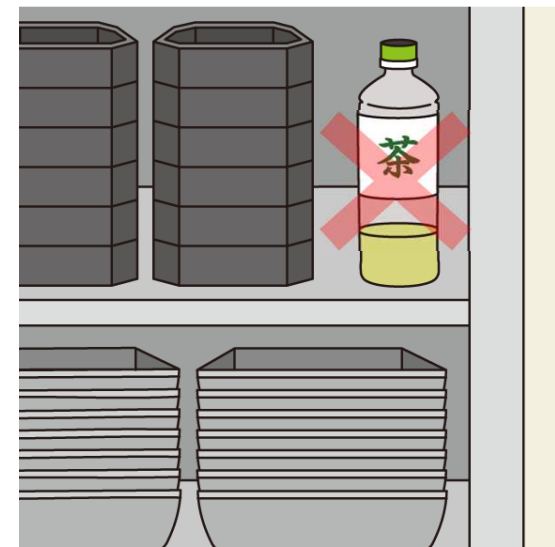
【手順4】 毒物等混入の予防

(4-2) 毒物等を食品に近づかせないための対策

- 殺虫剤、洗剤、消毒液、医薬品については、保管場所を定め、定位置・定数管理を行い、施錠・監視による管理を徹底しましょう。これらについては、受払記録の作成、記録内容のチェックなどの数量管理を、食品防御の実務担当者、または施設の責任者が一括・集中的に実施してください。これらの紛失が判明した場合は、関係者（食品防御の実務担当者、施設責任者、食品衛生責任者、人事や総務の責任者など）に報告・周知し、事実関係を確認の上、イベント主催者や関係官庁への連絡等、後述する**(5-2)**で定めた対応を実施してください。
- 従業員の不要な私物の持ち込みを禁止しましょう。
- 従業員の適切な休憩・休養が確保されるよう、休憩スペースを設けましょう。その際、原材料や包材の保管場所とは分けましょう。



保管場所管理・施錠、監視カメラの設置



ペットボトル等私物の持ち込み

【手順4】 毒物等混入の予防

(4-2) 毒物等を食品に近づかせないための対策

➤ 従業員による私物等の持込みの制限

- 従業員による不正な私物や、敷地内に保管されているトイレ用洗剤、塩素、液肥、農薬等の異物の持込みを防ぐため、食品保管スペース内への持込み品の許可ルールを作ったうえで、ペアを作って互いにチェックしたり、リーダーがチェックする、私物として持ち込まれることの多い飲料・消毒液等は管理者側が準備して入場後の従業員に支給するなどの仕組みを構築する。
- 作業上必要のない戸棚・配電盤や、使用しない食品庫・冷蔵庫等について、これらが毒物等の一時的な隠し場所とならないよう封印する。

➤ 不要物や廃棄物の取り扱い

- 不要物や廃棄物が、いたる所に放置されていると、従業員や部外者の出来心を誘発し、異物混入に繋がってしまうことも考えられる。
- 定期的に、不要物や廃棄物、利用者・所有者が不明な物の放置の有無を確認し、気づいた場合は、早急に撤去する。



私物の持込み、
不要物の放置



使用しない食品庫等は
毒物の隠し場所にならないように施錠する

【手順4】 毒物等混入の予防

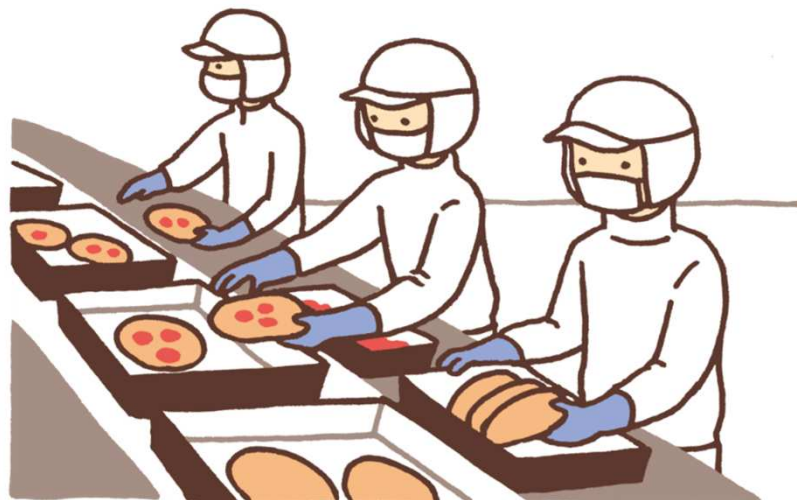
(4-3) 悪意を持つ者を食品に近づかせないための対策

(4-3-1) 従業員のアクセス管理

- あってはならないことですが、従業員による意図的混入も想定したうえで、それを防ぐ対策が必要です。そのためには、各従業員がどの時間にどの工程にいるかを即座に確認できるようにし、関係のない従業員が、食品に容易に近づくことができないようにすることが有効です。

➤ 従業員のアクセス制限

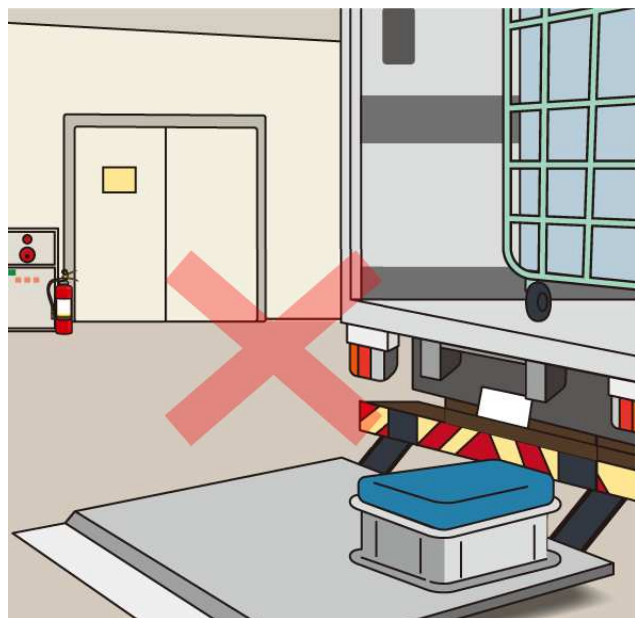
- 全ての工程について、作業を行う従業員（日・時別の担当場所、行動範囲）をその日の業務前に決定し、腕章等により各従業員の役割を識別できるようにする。
- 特に、食材保管庫など、無人となることが多い場所は立ち入りを明示的に制限し、立ち入り可能な従業員を限定する。（万全を期すためには、単独作業の禁止や、静脈認証等の生体認証による入退室管理システムの導入も考えられる。）



【手順4】 毒物等混入の予防

(4-3-2) 外部業者のアクセス管理

- 前述の【手順2】に従い、訪問者の把握を徹底しましょう。
- 外部業者の動線管理を徹底しましょう。
- 脆弱な工程・場所に、無関係な外部業者が容易に近づけないよう、一時入館証や帽子の着用を義務付けるなど、従業員による識別を容易にし、必要のないエリアに入ってきた時にすぐ発見できるようにしましょう。外部業者に対しても挨拶や声掛けを励行し、「周りから見られている」という状況を作り出すことも効果的です。



監視のない積み下ろし、積み込み作業



【手順4】 毒物等混入の予防

(4-4) 混入行為の防止

- 毒物等を食品に近づかせない対策をし、悪意を持つ者を食品に近づかせない対策を講じたあとは、「混入行為の防止」対策を行うことで、食品防御を万全のものとしします。

(4-4-1) 脆弱箇所の防御

- (4-1) で把握した脆弱箇所について、作業管理リーダーの配置、カメラの設置、複数人による作業チームの構成（単独作業としない）など、意図的混入のリスクをできるだけ低減するような対策を講じましょう。

(4-4-2) 積み下ろし作業、積み込み作業の監視

- 食材の積み下ろし・積み込み作業は、単独作業となるケースも少なくないため、気を付けて監視しましょう。



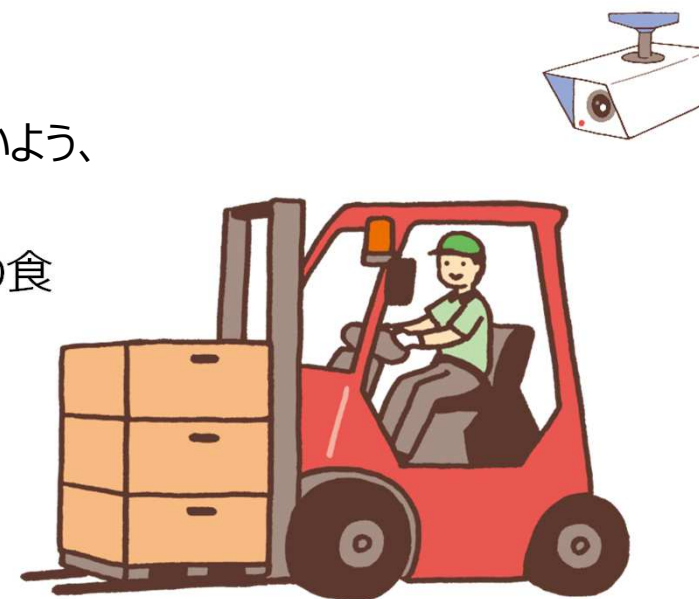
➤ 給水設備への侵入防止措置

- 給水設備についても、これに毒物が混入された場合、被害が広範囲に渡る可能性があるため、食品防御対策は必ず行う必要がある。
- 物理的な施錠はもちろん、給水設備のあるエリアに立ち入れないような動線管理、警備も必要である。

【手順4】 毒物等混入の予防

(4-5) 食品や包材等の納入・保管に関する対策

- 敷地の外で毒物等が混入された食品・包材等が持ち込まれないよう、食品等の納入時に、異常がないかよく確認する必要があります。
- 倉庫で保管中の食品に毒物等が混入されないように、保管中の食品は十分に気をつけて監視を行いましょう。



➤ 納入された食品・包材等の確認

- 敷地の外で毒物等が混入された食品・包材等が持ち込まれることを防ぐため、適切に封印された状態で搬入されたか、食品・包材等に異常がないか、複数の担当者で、納入時によく確認する。
- 異常を発見した場合や、納入数量と発注数量との整合がとれない場合、その食品・包材等は受け取らないようにする。
- 食品・包材等の搬入車両については、バンボディ（屋根付き、閉鎖系）のもの、可能であれば鍵付きかつ封印可能なものとする。

➤ 保管中の食品・包材等の増減や意図的混入行為の兆候への対応

- 従業員の巡回やカメラ等により、保管中の食品・包材等の継続的な監視、施錠管理等を行う。
- 保管中の食品・包材等の紛失や増加、意図的混入の兆候・形跡等が認められた場合は、食品防御の実務担当者、施設責任者や食品衛生責任者に報告し、その対応を決定する。

【手順4】 毒物等混入の予防

(4-6) 運送車輛の対策

- 運送車輛は閉じた空間であり、最大でも2名程度の乗車となります。ドライバーの行動の把握、車内に持ち込む私物の管理も困難となります。
- そのため、イベント開催中については、以下のような対策を取ることが望ましいと考えられます。

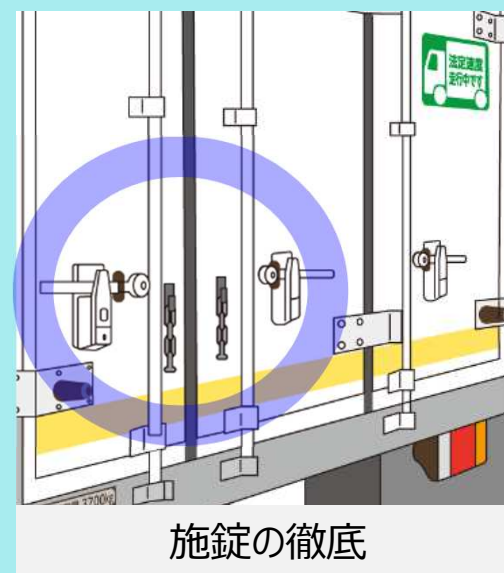


➤ 施錠の徹底

- 荷台扉については、荷積み、荷下ろし時以外は施錠をする。可能であれば開扉センサーを設置し、管理センターの職員など、ドライバー・同乗者以外の遠隔にいる者が、荷台扉の開閉を確認できるようにしたり、施錠とともに封印を施すことにより、無断の開扉の有無等を確認・記録できるようにする。
- 車輛を離れる際は、荷台扉、運転席・助手席の施錠を徹底する。

➤ 運転手の運行状況を確認する車載カメラの設置

- 車内に、運転手の運行状況を確認する車載カメラを設置する。
- ただし、このような車載カメラの設置においては、従業員（ドライバー）と十分に協議をし、労使双方がその趣旨を十分に理解したうえで実施する。



- 【手順1】 準備
- 【手順2】 一般的な防犯対策の徹底
- 【手順3】 組織マネジメント
- 【手順4】 毒物等の混入予防
- 【手順5】 **モニタリングと対策の改善**

【手順5】 モニタリングと対策の改善

内容

- (5-1) 兆候の発見と報告
- (5-2) 健康危害発生時の連絡体制の決定
- (5-3) 第三者による確認

ポイント

- 実行犯は、最初はちょっとした悪戯から始め、世間や組織内の反響を見ながら、徐々に攻撃の度合いを増していく可能性もあります。そのため、明らかな被害の把握だけでなく、“ちょっとした”兆候のキャッチも重要です。
- 関係者、関係機関との連絡体制構築も重要となります。

【手順5】 モニタリングと対策の改善

(5-1) 兆候の発見と報告

- 実行犯は、最初はちょっとした悪戯から始め、組織内や世間からの反響を見ながら、徐々に攻撃の度合いを増していく可能性もあります。そのため、明らかな被害の把握だけでなく、“ちょっとした”兆候のキャッチも重要です。
- 以下に挙げたような兆候を発見した場合は、食品防御の実務担当者、施設責任者や食品衛生責任者への報告等を行います。

➤ 飲食提供施設内で発生する恐れのある悪戯や異常について

- 以下のような兆候が複数認められた場合には、イベント主催者へ報告する。

【兆候の例】

- ✓ 通常施錠されているはずのところが開錠されていた
- ✓ あるべき場所に薬品がない
- ✓ 落書きや器物破損が発見された
- ✓ ブラックメールが送られてきた
- ✓ 普段には見られない変わったごみが捨てられていた 等



【手順5】 モニタリングと対策の改善

(5-2) 健康危害発生時の連絡体制の決定

- 毒物等の混入や、自社で取り扱った商品の通常では発生し得ない製品の品質異常、商品の異味・異臭などが発生した際に、誰が、何を、どこと連携を取りながら対処するのか、事前に決めておくことが有効です。
- 既に実施されているリコール対応訓練等において、意図的混入の視点を加えることができないか、担当者等と検討・調整を行きましょう。
- 取り決めた内容に沿った訓練を繰り返し行い、課題抽出と改善を継続しましょう。



➤ 事前に決めておくべきこと（例）

- 大規模イベントの危機管理体制に盛り込むべきことは以下のとおり。
 - ✓ 意図的混入やそれが疑われる事態が発生した場合に、誰が、どこに、何を、どの順番に連絡するのか。
 - ✓ 自社の関係者の連絡先と連絡の順番、自社以外の関係機関（サプライヤー、警察、消防、関係省庁、自治体、保健所等）の連絡先と連絡の順番。
 - ✓ 事前に構築した危機管理体制のとおりに対応できない場合の対応責任者。

【手順5】 モニタリングと対策の改善

(5-3) 第三者による確認

- **【手順4】**までの対策を構築した上で、対策内容の十分さについて、第三者に確認してもらいましょう。（イベント開始前、開催中の双方において実施することが望ましい）。

➤ 第三者による確認の流れ（例）

- 食品防御の考え方にに基づき、対策を実施。
- 実施した対策のリスト、食品の取り扱い記録、作業シフトの記録などの準備。
- 第三者による定期的な立ち入り検査の受け入れ。
- 検査における指摘事項に基づいた改善の実施。
- 検査・改善結果の記録・保存。



信頼できる業者に委託し
記録はきちんと受け取り管理

参考文献

食品防御の考え方とその進め方 ～よくわかるフードディフェンス～



出版社： 公益社団法人日本食品衛生協会

ISBNコード： ISBN978-4889250749

定価： 3,240円

発行日： 2015年4月15日 初版1刷

実践！フードディフェンス 食品防御対策ガイドライン準拠



出版社： 講談社

ISBNコード： ISBN978-4061537439

定価： 2,376円

発行日： 2016年7月22日 初版1刷